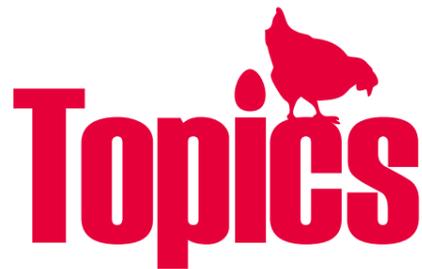


# 鳥インフルエンザの発生による国際的な影響

～欧州での発生と日本の種鶏輸入～

昨年12月以降、国内の養鶏場で高病原性鳥インフルエンザが続発。中国・朝鮮半島からといわれるウイルスは、欧州にも広まりつつある。今回は欧州でのAI発生が日本に与える影響を取り上げる。



## ●AIウイルスの発生が与える影響

昨年国内発生元となったH5N8亜型のウイルスは、専門家によると中国で何種類かのウイルス遺伝子が再集合し、図のルート②で韓国を経由して日本に侵入した可能性が高い。

同様のウイルスは台湾などでも流行し、更に昨年11月以降はドイツ、オランダ、英国、イタリアにも伝播し、被害をひき起こした(表)。

海外でAIが発生した場合、その国や発生州からの生きた家きん、家きん肉などの輸入が停止される。今回の欧州4カ国から輸入する肉類は少ないが、英国とドイツにある育種会社からは多くの生きた種鶏(親鳥)を輸入している。日本で飼育されている採卵鶏や肉用鶏の多くはこ

れらの種鶏から産まれるため、種鶏を安定して輸入できるように各育種会社は対策を講じている。

## ●採卵・肉用種鶏の各対策

国内にいる採卵鶏の多くは外国産で、ドイツのローマン社と米国のハイライン社などが育種をしている。これらの企業はさまざまな国に農場を持っている。現在、日本では北米で育種した鶏を輸入しており、今回のAIによる影響はない。また、北米でAIが発生した場合に備え、原原種鶏を輸入する場合もあり、国内で種鶏が不足するまで時間がとれるよう対策されている。

肉用鶏の場合、国内シェアが最も高い鶏を育種しているエビアジェン社は英国、次に続くコップ・バントレス社は米国の企業である。これらの企業もさまざまな国に農場を持っているが、日本に輸入される原種鶏はいずれも英国産であったため、英国でのAI発生にともない、原種鶏の輸入ができなくなった。しかし北米や豪州など、そのほかの地域

で生産されている原種鶏を代わりに輸入することができるため、種鶏が不足することはない。

## ●英国の「コンパートメント主義」

英国の肉用原種鶏が輸入できなくなっても、英国での続発が3カ月なく、清浄化が宣言されれば原種鶏の輸入が再開できる。更に現在、議論されているのが「コンパートメント主義」である。これはAIが発生した国や州で飼育されていても、高度な衛生管理により、清浄と認められる動物なら輸入を認める考え方である。英国はこの取り組みを積極的に進め、エビアジェン社を認定コンパートメントとしている。

2013年3月に英国から日本に対し、AIなどの発生時でも同社の種鶏の輸入を認めてほしいと要請があり、現在日本はその対応を検討している。この要請が認められれば、日本への肉用原種鶏の輸入はより安定するだろう。

AIが農場に侵入する可能性は、この冬、過去最高となっています。今からできる対策は、本誌20ページの記事のほか、JACCネット(<http://jacnet.zis-ja.com/>)に掲載のパンフレットでご確認ください。



表. 欧州でのH5N8亜型AIの発生状況

発生国	発生件数	発生時期
イギリス	家きん1件	平成26年11月
ドイツ	家きん4件、ほか4件	平成26年11月～平成27年1月
オランダ	家きん5件、ほか2件	平成26年11月～12月
イタリア	家きん1件	平成26年12月

(平成27年2月12日現在)

図. アジアのAI発生地域と日本への伝播経路



# ヨーロッパ視察報告

～ヨーロッパの養豚情勢～

JA全農グループでは現在、産子数が多く期待される新しいハイコープSPF豚の供給に向けた準備を行っている。今回、多産系種豚の先進地であるヨーロッパの管理技術を調査し、その際に得た情報を2回に分けて紹介する。1回目は、ドイツのハノーバー・メッセにおいて開催された、畜産および管理技術に関する国際展示会である「Euro Tier」について紹介する。

## ●Euro Tierとは?

Euro Tierは、DLG(ドイツ農業協会)が主催する畜産関連産業の見本市で、2年ごとにドイツ北部のハノーバー・メッセで11月に開催される。初回は1993年で、96年から現在のメッセで開催されるようになった。

ドイツのDLGは、1885年設立の農業・食品産業のための組織で、見本市や競技会の開催や、資材の品質認証などを主な業務としている。

Energy Decentralというバイオガスや風力など分散型エネルギーの生産利用関係の見本市も同時開催で、Euro Tierのチケットで制約なく入ることが可能である。

主催者発表では、今回は2,360の出展数(うちEnergy Decentralの出展数370)と156,000人の来場者があったとのことであった。ヨーロッパ各国からの企業の出展がほとんどだったが、アメリカや中国の企業も出展していた。ヨーロッパからの出展が多かったこともあり、分娩舎のフリーストールや豚用の遊具などアニマルウェルフェアに関連した資材も多く展示されていた。

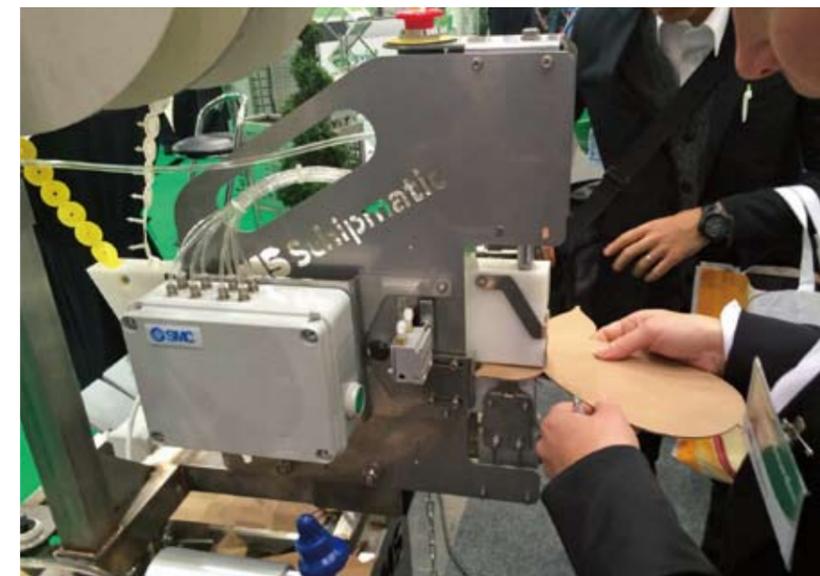
## ●ヨーロッパでのアニマルウェルフェアの考え方

アニマルウェルフェアに先進的に取り組んでいるヨーロッパにおいて

## ●Euro Tierで展示されていた資材の紹介

### 耳標・断尾・注射・経口投薬を半自動で実施する機器

分娩処置の作業省力化のためこのような機械が開発されている。機械に差し込まれているのは、子豚を模した型紙



は、すでに1960年代に密飼い等の近代的な畜産のあり方について問題提起され、イギリスにおける「5つの自由」の概念が普及している。現在では、EU指令としてアニマルウェルフェアに基づく飼養管理の方法が規定され、各国はEU指令に基づき、法令・規則等をそれぞれに定めている。

(参考)「5つの自由」とは、①飢餓と渇きからの自由、②苦痛、傷害又は疾病からの自由、③恐怖及び苦悩からの自由、④物理的、熱の不快感からの自由、⑤正常な行動ができる自由のことである。



圧死防止装置(母豚の場所が上下する)分娩舎での事故率軽減策として、いかに圧死を減らせるかが重視されていることの表れである



自動液餌哺乳器(左が哺乳期子豚用、右が離乳子豚用)産子数が増加した場合、乳頭数不足が懸念されるため、今後、こういった自動哺乳器が重要になってくると考える